園のおたより

第　４　号

令和７年７月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

プールに入らない

園長　関　由起子

連日の猛暑の中、こどもたちの楽しみはプールのようです。こども用の大型プールが園庭に設置された翌日の朝、2 組さんたちはみんなで長い間、プールを見つめていました。まだ水を入れていない空のプールだったのですが、みんながあまりに愛おしそうに見つめているので、何故なんだろうと、疑問が湧いてきました。多くのこどもたちは水泳を習っていたり、屋内外の公園プールで泳いだりした経験があると思いますので、園外のプールのほうが大きく立派だと知っていると思います。おそらく幼稚園のプールは浅く狭いけれど、いつも一緒に遊んでいる友だちと、全身水に浸かりながら好きな水遊びができることが魅力なのかしら、と想像してみました。

けれども、幼稚園のプールには入りたがらないこどもたちも数名おります。水が怖いのか、幼稚園のプールが嫌なのか、あるいは他の遊びがしたいのか、私はその理由を理解できていません。私はときどき、プールに入らない・入れないこどもたちと、水深 5 センチのビニールプールに一緒に足をつけながら遊んで（涼んで）います。

プールに入らないこどもたちと一緒に足水していることを娘に話したところ、“プールに入らない”という選択肢がこども側にあることに驚いていました。私は他園の遊び方を知らないので、本園での“こども自身が好きな遊びを自由に選択できること”が当たり前だと思っていました。幼稚園教諭を目指して教育実習に来た学生たちも、自分たちが経験してきた保育園・幼稚園では、小学校の授業のようにお絵描きの時間、砂場で遊ぶ時間、プールの時間と決まっていたため、本園の遊び方を見て、本園の先生は大変そうだと驚いていました。

先日、一般社団法人彩の国子ども・若者支援ネットワークの代表理事の土屋 匠宇三氏から、生活困窮の家庭のこどもたちへの学習支援についてのお話があり、進路選択に関して「こどもたちが自分で決断することを大切にし、その決断がどのようであろうとも、大人は全力で応援する」ことを強調されました。最近の大学生を見ていると、指示をいつでも待っている様子が気になります。些細なことのみならず、卒業研究上の重要な選択に関しても、「先生、決めてください」と言われることが多くなりました。私も学生の代わりに「決めてしまう」のですが、その後に困難な事態が生じると、その事態は“その決断をした先生のせい“になりがちで、困難に立ち向かわずに簡単に諦めてしまうことも増えているように感じています。このような学生の態度は決して学生自身が悪いのではなく、おそらく他者の意見に合わせた方が楽に人生を歩めることを、今まで生きていた中で学んできたのだと思います。まちがいなく、大人の責任です。

小さいときから、小さいことから自身の決断を促すことが如何に重要か、一生懸命に「プールに入らない」を主張しているこどもたちから教えてもらいました。けれども、こども自身による遊びの選択を促し、尊重し、そして遊びを発展させることは、簡単なことではありません。私は土屋先生のようにこどもが選択した遊びを “全力で応援出来ているかしら”と、こどもと一緒に足水に浸りながら、足水用プールの底に広がるキラキラ光る石の遊び方を考えています。

おばけ

副園長　小谷　宜路

３組では、数週間にわたって「おばけやしき」を遊戯室の一角に作って、楽しんでいる人たちがいました。先月末からは、こどもたちが『チケット』と手書きしたものを配ってテラスを行き来する姿があり、私も、一枚いただきました。さまざまなおばけを描いたり、自分たちがおばけに扮したりして、とても嬉しそうでした。１組では、『おばけなんてないさ』の歌や、その歌を題材にした絵本を楽しむこどもたちの姿に出会うことがありました。おばけを冷蔵庫に入れてカチカチにしたり、こどものおばけとおやつを一緒に食べたり、わくわくする歌詞の世界があります。２組にも、ようかい好きの人たちがいます。本格的な妖怪図鑑は人気の一冊になっているようです。

幼児期を生きているこどもたちにとって「おばけ」「ようかい」は、魅力的な存在で、確かに絵本や紙芝居などにも、よく登場します。おばけの登場する昔話は、その登場場面で盛り上がりを見せ、こどもたちが引き込まれる展開になっています。幼稚園の中で、今の３組のように「おばけやしき」をイメージした場をつくって、ごっこ遊びをすることも、よく見られる遊びの一つです。現実の世界と空想の世界を自由に行き来できるこどもたちだからこそ、どちらとも言えない世界に存在する者、どちらの世界も行き来する者として、「おばけ」や「ようかい」に自然と身近な親しみを感じるのかも知れません。「まほうつかい」「ようせい」「まじょ」なども、それに近い感覚の存在として、なりきってごっこ遊びをしているように感じます。

「おばけ」や「ようかい」が、本当にいるのかいないのか、信じるのか信じないのか、といったことではなく、その存在に惹かれ、その世界を十分に堪能できることが、幼児期ならではの体験でしょう。「おばけ」や「ようかい」というものを介しながら、“やっぱり少し怖いかも”・・・“でも少しなら大丈夫かも”・・・“面白いからおいでよ”・・・“びっくりした！”・・・などなど、こどもたち同士の結びつきも生まれていきます。張りつめた緊張の中でのドキドキではなく、友達と共有する楽しさや安心を含んだドキドキの世界が、そこにはあるようです。

おばけたちには、それぞれ好きな季節があるのでしょうか。今年もやってきた夏の暑さに張り切っているおばけ、夏の間はじっと我慢して寒くなるのを待っているおばけ、避暑地で休暇を過ごしているおばけもいるかも知れません。２学期以降も、おばけなどの話題になった時には、こどもたちとドキドキを共にしてみたいと思います。

クラスだより

１くみ

「こどもの「遊ぶ」から」

暑い夏、ついに梅ジュースが完成し、おうちの方と一緒に飲みました（実はその前に１組だけでお味見をしました）。こどもたちは、初めて口にする味を喜ぶ人や思った味との違和感に難しい表情を浮かべる人がいて、それぞれの味わい方があったようでした。梅を収穫したのは５月末でした。その頃はまだ学級の友達の名前を知らない人たちが集まっていました。緊張や不安もある中で、「遊ぶ」を通していろいろな感情をもつようになり「あの子」から「〇〇ちゃん」に変わっていったりしました。

ある本を読んでいると「遊」という文字は神が船に乗って仕事に行くことを表した象形文字であると書かれていました。それが今で言う「遊ぶ」の意味に使われるようになったのはどうしてなのだろうかと考えていました。そして、埼玉大学の飯泉先生（日本文学の博士）にお聴きしてみたところ、説文解字という、漢字の意味を解説した古い本に「旗が流れる様子」とあり、風の向くまま、気の向くままに、自由に振る舞うのが「遊」という漢字の意味であったようです。その様子は、神様が憑依した様に似ているのでしょう。続けて、日本語の「あそび」は神様が喜ぶことをする意味で、神様は人間とは真逆のことを好むので、通常の人がしないよう自由な言動を「あそび（祭）」では行います。どちらにしても、大人が思いもよらないよう自由な言動が「アソビ」なのでしょう。と教えてくださいました。

こどもの遊びは、似ていると思います。例えば１学期の様子から、お姫様が積み木のレーシングカーに乗って″ロイヤルポスト″に向かいハンバーグを食べたり、大きな船に乗って海に飛び込んで泳ぐ人もいれば、船から降りて車を走らせ会社に行く人もいたり、警察になって泥棒を追いかけるために出かけて「すいませーん！マグロのお寿司と納豆巻きください」と回転寿司に食べにきたり。やぐらの上では水をペンキに見立ててせっせと塗っているその下には、警察署があって「わわわ！雨が降ってきた」と雑巾で雨漏りを拭いたり。アヒルの帽子をかぶったら「グワッグワッ」と鳴いてお互いに頷いたりして。

自由に創造した世界で夢中になって遊ぶ姿は、ただかわいいというだけでは言い表しきれない、神様の領域でしょうか。たしかに、「遊ぶ」の漢字の中には子があって、だから子は「遊ぶ」のスペシャリストなのだと、こどもたちを見て深く頷いた１学期でした。

２くみ

「夏の楽しみ」

梅雨と真夏が交互に訪れるようなお天気が続いています。水や氷の冷たさが、生活の中で心地よく感じられる季節となり　ました。

6月の終わり頃、園庭で草花を集めていた人が、袋に水とお花を入れて、給湯室の冷凍庫で冷やしてみることにしました。翌日、冷凍庫から取り出すと、中はカチカチに凍っていて、触るとひんやりと心地よく、太陽の光に透かすと光が反射してとても美しく見えました。プールでの遊びも、子どもたちにとっては格別の楽しみです。2組と3組では大きなプールを使って、水に浸かりながら思い切り遊びました。水がたっぷり溜められるプールにみんなで入ると、その心地よさに自然と笑顔が広がっていました。

砂場でも、水を使った遊びが盛り上がっています。「温泉」や「ダム」に見立てて掘ったり、水を流したりする遊びを繰り返す中で、イメージの世界もどんどん広がっていきます。先日、「温泉」を掘っている近くに、ビールケースとベンチを運んできて、砂で何かを作っているひとがいました。それを見た人が、「ここは温泉ですよ」と声をかけると、「温泉だんご屋さんですから」との返答が。すると、周りの人たちも納得した様子で、掘る手を止めてその「温泉だんご屋さん」に向かい、温泉づくりの合間に一息ついていました。ただ「掘る・流す」ことに熱中していた遊びに、「温泉だんご屋さん」という新しいイメージが加わったことで、遊びの世界にひとときのやすらぎと広がりが生まれたようでした。

夏ならではの水の心地よさをたっぷり感じながら過ごした日々。これからさらに暑さの厳しい日が続き、戸外での活動が難しい日も増えてきますが、夏休みの間も、それぞれの「夏の楽しみ」が充実したものになりますように。そして、9月には元気に登園して、また新しい楽しみを一緒に見つけていけることを、楽しみにしています。

３くみ

「ケンカって悪いこと？」

１学期の間、３組のみんなと過ごす中で、それぞれの「やさしさ」をたくさん見かけました。一方で、相手の気持ちを気にかけるあまり自分の思いを我慢するような姿もあり、こどもたちの心のどこかにみんなとケンカをしたくない、という気持ちが垣間見える瞬間もありました。

ある一言をきっかけに大きなケンカになったことがありました。落ち着いて２人の話を聞いてみると、“相手の言い方が嫌な気持ちになる言い方だった”や“大きな声で言われて悲しかった”など、もやもやした気持ちや今の自分の気持ちを言葉にして教えてくれました。お互いの心の内にある思いを吐き出せたことで、その後には「なかよしになったんだよ」と２人で寄り添って過ごす姿がありました。そのことを心配していた３組のみんなにも伝えると、ほっとした様子があり、２人の姿がケンカをしてもなかよしに戻れるから大丈夫という、安心感を与えてくれたのではないかと思います。

他にも「〇〇ちゃんがね、ごめんねって言ってもずっとぷんぷんしてて悲しいの」と不安を話してくれる人がいました。お互いの話を聞いてみると、怒っていた人は、いつも相手に謝ってもずっと怒っていることが嫌で、今回は自分が怒っているんだ、と心の内を話してくれました。それを聞き、はっとしたような表情で「私も〇〇ちゃんがずっと怒ってたから悲しかったんだ」とお互いにもやもやした気持ちを抱いていたことに気付いたようでした。気持ちを言葉にして出し合った後には、「ケンカをするのもいいのかもしれないね」とすっきりとした表情で教えてくれました。２人は話の中で、小さな嫌なことは我慢して、それが大きくなって我慢できなくなった時にその気持ちを爆発させるんだ、と教えてくれました。自分の思いを少し我慢して、だんだんと思いがすれ違い、大きなぶつかり合いになってしまうことがあることを私自身もこどもたちの姿から教えてもらいました。

相手を思いやる気持ちを大切にしながら、自分の中にある気持ちも大切にし、それがどんな気持ちであってもよいこと、どんなふうに伝えたら相手にも自分の思いを届けることができるのかをこどもたちと一緒に考えていきたいと思います。２学期の生活でも、互いの思いをじっくり話し合う時間をもちながら、相手の気持ちと自分の気持ちに向き合い、互いのことをより知る機会となるよう支えていきたいと思います。